様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月３０日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０８００
研究課題名（和文）　我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育に関する研究 ２

研究課題名（英文）　Art Education based on Child-Centered Education in Japan after World War Ⅱ, The second Part

研究代表者
新井　哲夫（ARAI TETSUO）
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号：４０２２２７１５

研究成果の概要（和文）：

本研究は、平成 17 年度から平成 19 年度まで3カ年間にわたって行った科学研究費補助金に基づく研究「我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育に関する研究―創造美育運動を中心に―」（課題番号　17530634）の成果をもとに、我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育の実態及び戦後美術教育に与えた影響について、さらに詳細に明らかにしようとするものである。

前研究では、創造美育運動の組織及び活動原理を明らかにするとともに、1940 年代における欧米の児童中心主義の美術教育の理念及び方法について調査し、青年前期（思春期）の美術教育に対する無関心（軽視）が、我が国の創造美育運動に固有の現象であったことを明らかにした。

本研究は、これまでの研究成果をふまえて、特定の地域あるいは個人に即して調査を行うことにより、創造美育運動の実態を学校現場における教師の日常的な教育活動に即して明らかにようとしたものである。本研究では、創造美育運動に最も早い時期から関わり、地元福井県をはじめとして、創造美育運動の全国的な発展に重要な役割を果たした木水育男に注目し、中学校における美術教育の実践について分析することにより、青年前期（思春期）の子どもを対象とする創造主義の美術教育の課題について考察した。また合わせて、創造美育運動に批判的な立場から、高校生を対象とする独自の美術教育論を展開した大勝恵一郎の実践について考察し、青年前期（思春期）の美術教育における木水育男の美術教育の意義及び位置づけ等について検討した。

なお、同時代の教育状況との関連については、近年戦後教育史に研究の再検討が行われており、最新の動向をふまえた調査がさらに必要である。

研究成果の概要（英文）：

This work is a continuation of a study on art education based on child-centered education in Japan after World War Ⅱ. In these studies, I focused on the Souzobiiku Movement, because this movement has been positioned as an realization of child-centered art education in Japan after World War Ⅱ.

In the first study, I investigated the organizational characteristics of the Souzobiiku Movement and comprehensively examined the theoretical problems involving the principles of the movement.

In this study, I explored the actual situation of the Souzobiiku Movement through the practices of two art teachers: Ikuo Kimizu, who was a leader of the Souzobiiku Movement, and Keiichiro Okatsu, who criticized the movement. Although the thoughts of these two individuals on art education were different, they shared one common aspect: They provided art education to adolescent children. By analyzing their thoughts and practices on art education, I clarified several problems of the Souzobiiku Movement and measures for improving art education in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：児童中心主義，美術教育，創造主義美術教育，創造美育運動，戦後美術教育史，思春期，民間美術教育運動

１．研究開始当初の背景

創造美育運動を対象とした研究や批評は、これまでに「美術教育における個人的自由主義の批判」（国分一太郎,1955／『児童心理』Vol.9,No.1）、『創造美育をこえて』（川口勇,1956）、「美術教育・日本の隘路」（井手則雄,1955／『認識と創造』所収）、「創造美育の運動」（島崎清海，1966／『日本美術教育総鑑』所収）、「創造美術教育」（滝本正男，1972／井手則雄編『美術教育大系（第１巻）』所収）、「解放と認識」（鈴木五郎,1988／『岩波講座教育の方法 7』所収）、『初期創美運動について』（初期創美運動を記録する会,1991）、「『創美』研究に向けて」（柴田一豊,1992／東京学芸大学紀要）、『創造美育の実践 児童画集』（島崎清海・高森俊,1997）、「創造主義美術教育における『物語の絵』をめぐる考察」（芳賀正之,2000／鳴門教育大学研究紀要）など、1950年代半ばから現在に至るまで断続的にではあるが数多く見られる。

これらの多くは、当事者自身の回想や報告、対立的立場からの批判、戦後美術教育史に関わる概説的論述を内容とするものであり、いずれも客観的な事実の検証に基づく学術研究としては十分とは言い難いものである。つまり、それらは、〈運動を全体的視野から捉える視点が希薄である〉〈伝聞や通念に基づくもので、事実関係の把握や確認が不十分である〉〈主導者である久保貞次郎個人の思想と運動組織体としての理念や主張との区別が曖昧である〉など、客観性や実証性という点で課題を残すものが多い。そのため、創造美育運動の全盛期である1950年代から既に半世紀を経ていながら、未だにその実像が明らかにされないまま、情緒的なレベルでの偶像視や神話化が進行しつつある。

研究代表者による創造美育運動を中心とした「我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育に関する研究」は、上のような状況をふまえて着想されたものである。

２．研究の目的

「創造美育運動」は、1950年代を中心に、創造主義の美術教育を掲げて活発な活動を展開し、我が国の戦後美術教育に多大な影響を与えた民間美術教育運動である。創造美育運動そのものは既に歴史的役割を終えているが、運動を通じて普及した表現観や美術教育観は、今日の美術教育に対しても大きな影響を残している。このように創造美育運動は戦後美術教育史においてきわめて重要な民間美術教育運動であるが、活動の実態や戦後美術教育に与えた影響等に関する実証的な研究はほとんど行われていない。

本研究は、研究代表者がこれまでに行った創造美育運動の主導者である久保貞次郎の美術教育論に関する研究と創造美育運動において軽視された鑑賞教育に関する研究、及び平成17年度から３カ年間にわたって行った研究「我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育に関する研究―創造美育運動を中心に―」の成果をもとに、我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育の実態及び戦後美術教育に与えた影響について、さらに詳細に明らかにしようとするものである。

前研究「我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育に関する研究―創造美育

運動を中心に―」では、創造美育運動の組織及び活動原理を明らかにするとともに、1940年代における欧米の児童中心主義の美術教育の理念及び方法について調査し、青年前期（思春期）の美術教育に対する無関心（軽視）が、我が国の創造美育運動に固有の現象であったことを明らかにした。

本研究は、これまでの研究成果をふまえて、学校現場（とりわけ中学校）における日常の教育活動に即して、創造主義の美術教育が具体的にどのように展開されたのか、その実態を調査することにより、創造美育運動の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

以下の方法により研究を行う。

(1) 文献調査に基づく研究

これまでに収集した創造美育運動に関する書籍、雑誌、図版資料等に加え、新たに文献資料等の発掘・収集を行い、資料の充実を図る。

それらの文献資料を調査・分析し、教育現場における創造美育運動の実態を明らかにする。

(2) 現地調査に基づく研究

創造美育運動によって生まれた子どもの絵画作品等について、それらを保管・展示する施設、展覧会等に出向き、資料収集と現物による調査を行う。

(3) 調査結果に基づく考察

文献資料の分析及び現地調査の成果をもとに、創造美育運動の成果と課題を、学校現場の日常的な教育活動に即して明らかにする。

４．研究成果

本研究では、創造美育運動に最も早い時期から関わり、地元福井県をはじめとして、創造美育運動の全国的な発展に重要な役割を果たした木水育男に注目し、中学校における美術教育の実践を分析することにより、青年前期（思春期）の子どもを対象とする創造主義の美術教育の成果と課題について考察した。

木水育男に注目した理由は、木水が創造美育運動の主要なリーダーの一人であったことと、現場の教員として行った実践の成果を生徒作品として今日まで残していることによる。創造美育運動に関する研究の資（史）料としては、運動のリーダーであった久保貞次郎や運動を理論的な側面から支えた北川民次による著書や批評などは直接目にしやすい形で残されており、その量も豊富である。一方、教育実践に直接かかわる資（史）料については、教育雑誌等に掲載された実践報告や児童画集などの図版がほとんど唯一のものである。しかも、実際にどのような教育が行われたのかを実践報告のみから把握することにはおのずから限界がある。そこに教育実践を日常の教育活動に即して把握することの難しさがある。

そのような折、2009年10月から2010年1月にかけて、木水育男が1949年から1960年初めにかけて指導した生徒作品の展覧会が開催され、169 点に上る生徒作品の図版がデジタルデータとしてDVDに保存され頒布された。研究代表者は、越前市、京都市、東京都で開催された三つの展覧会に出向き、木水が指導した生徒作品を調査するとともに、デジタルデータをもとにそれらの生徒作品について詳細な分析をおこなった。加えて、木水が 1950 年代に書籍・雑誌等に執筆した実践報告やエッセイ等の著作物を分析することにより、木水の教育実践の背景となった美術教育に対する考え方や教師としての姿勢等について調査した。

なお、木水が行った美術教育について検討する際、その意義をより客観的に評価するために、創造主義の美術教育とは異なる立場から高校生を対象とした美術教育を実践し、独自の成果を上げている大勝恵一郎の美術教育について考察した。

本研究を通して再確認できたこと及び明らかになったことは以下のことである。

（1）創造主義の美術教育は、幼児や就学前後の年齢の低い子どもには適用しやすいが、表現活動に対して意識的、自覚的になる年長の子どもには適用しにくいものであった。

創造美育運動は、幼児や就学前後の美術教育に偏っていたと言われている。しかし、欧米の児童中心主義の美術教育は、理想主義的な色彩の強い初期の段階から、1930年代にはより現実的なものに転換しつつあった。1940年代に著されたW.Johnstoneの *Child Art to Man Art*(1941)やV.Lowenfeldの *Creative and Mental Growth*(1947)はその成果と見ることができる。しかし、我が国における児童中心主義の美術教育の具体化として位置づけられる創造美育運動は、理想主義的な色彩の強い初期の段階を出ることはなかった。運動の当初は必ずしも年齢の低い子どもの美術教育にのみに関心が向けられていたわけではなかったが、北川民次が「創美の方々は、たいてい、中学校や小学校の作品から出発して、だんだんに後ずさりに年少者の研究に走り、

幼稚園から幼児に目を向けていった」（「新しい美術教育への期待」1957）と指摘しているように、徐々に重心が年少者の美術教育に移っていった。

このような傾向をもたらした最も大きな理由は、久保貞次郎が唱導する創造主義の美術教育そのものにある。それは、欧米における初期の児童中心主義の美術教育―子どもは生まれながらに豊かな創造力を持っているのだから、大人の余計な干渉を除けば、子どもはその創造力を存分に発揮するはずであるとする素朴な理想主義に基づく―に近いものであり、自己中心的な世界に充足する年齢の低い子どもを対象とした美術教育には比較的適用しやすいが、表現活動に対して意識的、自覚的になる発達段階の子どもには適用しにくいものであった。

その意味で、中学校における木水の実践は、久保の創造主義の美術教育が適用しにくい発達段階の子どもを対象としたものであり、創造美育運動においては画期的な意味をもつものであったということができる。

（2）創造主義の美術教育には学校教育制度は前提されていないため、学校教育（特に中学校）において適用するためには、教師に並外れた資質・能力が求められた。

木水の美術教育は、久保の創造主義の美術教育論を原則としてふまえ、実践レベルにおいては北川民次の美術教育論に決定的な影響を受けたものでもあった。木水が影響を受けた北川の美術教育論は戦後発表されたものであるが、それはメキシコの野外美術学校での経験を基に、創造主義の美術教育のパラダイムを借りて理論化したものである。つまり、メキシコの野外美術学校は絵を学びたい子どもが任意に通うことができるいわば絵画教室のようなものであり、北川の美術教育論もまた日本の学校教育制度とは異なる文脈で形成されたものであった。北川の美術教育論もまた、中学校の美術教育に簡単に適用できるものではなかった。

以上から、木水の美術教育は、思春期の子どもの美術教育には元々適用しにくい創造主義の美術教育を、野外美術学校という日本の学校教育とは全く異なる文脈から生まれた北川の美術教育の方法論を手がかりに、中学校において適用しようとしたものと言うことができる。

木水が苦心して実践した方法は、次のようなものである。

①子どもと教師との間に徹底した信頼関係を築く。
②教師として当然視される威厳や道徳観などから自由になる。
③表現活動に対する関心・意欲を高め、常に新鮮な気持ちで活動に取り組めるような雰囲気や環境を作る。
④子どもが描きたいものはどんなものでも肯定し、描かせる。
⑤他と比べるのではなく、その子どもの自然な表現を尊重して保証を与え、自信を持たせる。

箇条書きにすると、それほど特別なことには感じられないおそれもあるが、これらのことを現行の学校教育制度下において日常化することはきわめてむずかしいことである。

現在残されている木水が指導した生徒作品は、表現の多様性と一つ一つの作品の密度の高さによって特徴付けられるが、それらの作品から木水の美術教育が傑出したものであったことがわかる。しかし同時、それは木水育男という類い希な資質・能力を持つ教師にのみ可能な美術教育であったと言わざるを得ない面もある。

（3）創造主義の美術教育の限界を超えるものであった木水の美術教育の意義は、創造美育運動の内部においては十分に理解されなかった。

木水育男の美術教育は、今日の目から見ると久保貞次郎主導の創造主義の美術教育のもつ限界を超えたものということができる。しかし、創造美育運動の内部では、「敬遠されがち」（野々目桂三）であり、その意義が十分に評価されたとは言えなかった。

そこに、創造美育運動の一つの重要な課題を見ることができる。思春期の子どもを対象とする美術教育は、木水の美術教育の方法上の特色に見られるように、子どもとの日常的な関わりのなかで、時間をかけて一人一人の子どもを理解し、信頼関係を築くことが必要である。また、思春期の子どもの表現は、かならずしも、のびのびとし、生き生きとしたものとは限らない。むしろ、屈折した心情や鬱屈した感情を絞り出すように吐露した表現、つまり久保のいう「創造的な絵」の基準にはそぐわないものも少なくない。しかし、そうした表現も、子どもの自然な表現として共感的に受けとめることができなければ、思春期の美術教育は成り立たない。

その点で、大勝恵一郎の美術教育は、高校生を対象とするものであり、創造主義の美術教育とは異なる立場から実践したものでは

あるが、木水の美術教育と共通するものがある。

大勝の美術教育の最も大きな特色は、高校生の内面を構想表現として表出させることを重視し、それにふさわしい表現様式として、「表現主義」を重視したことである。この時期の子どもが、「写実」にこだわりやすいことはよく知られているが、それに対して外面的な描写よりも内面の表出を重視させたことは、青年期（広い意味での思春期）の子どもの実態を的確に把握していた大勝の慧眼というべきである。木水に比べ、大勝の美術教育は造形教育としての専門性が高く、構想画のテーマにも文学的あるいは哲学的要素が強く表れているが、それは大勝の美術教育の対象が都会の有数の進学校の生徒であったことに起因するものであろう。そうした相違にも関わらず、思春期の子どもの心情に形を与えようとしている点で、両者の美術教育には共通するものがある。

木水の美術教育が創造美育運動の内部において、その意義が十分に理解され評価されなかったのは、創造美育運動が初期の児童中心主義の理想主義を克服できなかったことによるが、メンバーの中にはもちろん木水のように中学校や高校の現場教師がいた。それにも関わらず、それが矛盾として顕在化されずに終わったのは、組織そのもののあり方に問題があったためである。

（4）創造美育運動の内部では、創造主義の美術教育のもつ〈思春期の美術教育には適用しにくい〉という課題を克服しようとする議論が高まらなかった。

創造美育協会（創美）が設立され、全国的な運動に発展しようとした当初は、国際的な美術教育思潮の影響もあり、思春期の美術教育に目を向けようとする動きがあった。また、1958 年には、久保と大学の同期であり、創美の有力な文化人メンバーでもあった周郷博が W.ジョンストンの『思春期の美術』を翻訳し、「訳者まえがき」で創美は幼児、幼年教育にふさわしい教育の原理を上級の子どもたちにまで持っていってしまおうとするきらいがあったと警告を発していた。

年齢の高い子どもを対象とする美術教育に対する関心が十分に汲み上げられず、「創美の仕事は幼児や就学前後の美術教育に偏っていたところがあった」（周郷）と指摘されるに至った最も大きな理由は、運動の内部で、そうした問題を自由に議論できる場が存在しなかったことにある。創造美育運動は、全国組織としての発足当初は、立場の異なる多様なメンバーが参加した連合体のような組織であった。しかしやがて、立場を異にする有力メンバーが離れていき、久保貞次郎を頂点とする組織に変容していった。その結果、久保の関心とは異なる視点や発想による議論が生まれにくい状況に生じたといえる。それは、北川民次が創美はだんだんと後ずさりに年少者の研究に走ったと指摘するように、欧米の児童中心主義の流れとは異なる、むしろ後ろ向きの方向であった。

もともと美術や美術教育に対して門外漢であった久保に、国際的な視野から児童中心主義の美術教育の動向に対する目配りを期待するのは酷であろう。むしろ、久保の個人的な興味や関心に関わりなく、多様な考え方や資質・能力を持つ人材がそれぞれの関心に基づいて自由に議論できる空気が希薄になっていたことに根本的な原因がある。

そのような雰囲気は、久保と対等に議論できるメンバーが次第に少なくなり、久保の周囲に彼を信奉するメンバーのみが残ったことによって生まれたものであろう。その結果、創造美育運動は久保一人の言動に過度に依存することになり、組織や運動の硬直化を招いた。久保が改革運動のイデオロギーとして直感的に仕立てた創造主義の美術教育の理論が、現実によって検証されることなく保持されたのも、硬直化の一例といえる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本研究において明らかになった主な事項は以上のようであるが、今後さらに検討が必要な課題について以下に記しておきたい。

それは、創造美育運動と同時代の教育状況との関連の問題である。近年、戦後教育史の見直しの議論が活発になっており、従来の通説が大幅に書き替えられる可能性が出てきた。とりわけ創造美育運動の拡大期から退潮期に重なる 1950 年代は、戦後教育史の中でも最も大きな変動期として位置づけられており、通説の見直しによって評価が大きく変わる可能性がある。

創造美育運動の歴史的意義に関する評価は、同時代の教育状況と関連づけながらを行う必要があるが、現時点では戦後教育史の見直し作業に伴う研究成果の蓄積はまだ限定的である。したがって、今後の戦後教育史の見直し作業の進展に配慮しながら、創造美育運動の歴史的意義についてもさらに検討を続ける必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①新井哲夫、鯖江市中央中学校及び武生第三中学校における木水育男の美術教育―中学校における児童中心主義の美術教育の展開―、第四次美術教育ぐんま塾年報 2010、査読無、2011、印刷製本中

②新井哲夫、木水育男が指導した中学生の絵―好きなものを好きなように描く―、第三次美術教育ぐんま塾年報 2009、査読無、2010、pp.51-68

③新井哲夫、大勝恵一郎と「青年期」の美術教育、第三次美術教育ぐんま塾年報 2008、査読無、2009、pp.61-80

④新井哲夫、思春期の美術教育とその課題、群馬大学教科教育学研究、第 8 号，査読無、2009、pp.69-78

〔学会発表〕（計３件）

①新井哲夫、木水育男が指導した中学生の絵、第四次美術教育ぐんま塾 2010 夏季合宿、2010.8.7、群馬県みなかみ町

②新井哲夫、大勝恵一郎の高校における美術教育の実践、第三次美術教育ぐんま塾例会、2009.10.24、前橋市

③新井哲夫、我が国における児童中心主義の美術教育に関する研究―創造美育運動を中心に―、第三次美術教育ぐんま塾例会、2008.6.29、前橋市

〔図書〕（計２件）

①新井哲夫・天形健・山口喜雄編著、建帛社，小学校図画工作科の指導，2010，全 198 頁（45-58,134-146）

②福田隆眞・福本謹一・茂木一司・新井哲夫他共著，建帛社、改訂美術科教育の基礎知識、2010，全 240 頁（79,171-174）

６．研究組織

(1)研究代表者

新井　哲夫（ARAI TETSUO）

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：４０２２２７１５

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし